

末黒野

すぐろの

2月号
(通巻930号)



笙の音

森清

堯

蟪蛄の仁王のポーズ庄屋門
ゆるやかにつの字のの字と秋の蝶
日矢射してひかる一条水引草
ひとり居も無聊にあらず小鳥来る
川渡る風に艶増し大毛蓼
初鴨のまづのひと声朝の池
妻居らずすすむ手酌や後の月
鎌尾根のくつきりの影柿日和
霜降や浦曲に鳶の高き笛
島裏より富士うすうすと秋惜しむ
社務所より洩るる笙の音秋澄めり
思はざる夜半の嵐や秋の逝く

風の芒

岡野里子

江の島の磴の百段身に沁みて
弁天橋より富嶽一望秋高し
裏路地は猫のたまり場島の秋
お神籤を結べば零れ乱れ萩
参道へ茎のみ残し狐花
穂を解いて風の芒となりにけり
花芒傾れ野の風山の風
水平線秋の名残の弧を描き
彩れる木の影池へ水の秋
露天湯に掬ふ月影十三夜
秋澄むや島に漂ふ醬の香
秋深む身内のどこかいつも泣き

瑞声

冬 芒

黒 滝 志麻子

(願 問)

無人店に硬貨のひびき秋の宵
渡し場は碑ひとつ霧流る
紅引くを覚ゆる少女天高し
丸薬の苦きを日課冬に入る
道標の文字の薄れや冬芒
老いぬれど口は達者や七五三祝
冬芒風の重みを掴みゐて
小流れのみなもと知らず冬紅葉

甲 矢 集

配列は音順、月毎の循環

薄墨の闇

森 清 信 子

せせらぎの届く林道吾亦紅
啄木鳥や雲押し上ぐる山気なる
故郷の闇早く下り十三夜
松島の薄墨の闇後の月
爽籟や鰹木の金眩しくて
神域の縄囲ひなる刈田かな
境内の土俵冬日の濃かりけり
秋の夕富士彩雲を従へて
紅葉且つ散る湖に向く美術館
醤油蔵の屋根黒ぐると石路の花

江の島逍遙

石黒興平

行く秋の海豚の鷗尾の駅舎かな
竜淵に潜む静けさ片瀬川
秋風や水族館の椰子並木
手びさしに入る江の島秋惜しむ
磴登るほどに靈氣や秋深み
竜宮城を模したる門や雁渡し
秋風のつなぐ対岸逗子葉山
龍恋の鐘の音間遠秋うらら
秋寂ぶや島の駐在までも留守
釣人と島の抜け道秋澄めり

トランプ

小田嶋野笛

おのづから種弾き出し椿の実
身籠りし遠き月日や柘榴裂け
金の舟に船頭あらず月渡る
勝つまでは止めぬトランプ夜は長し
碁敵の長考の間や走り蕎麦
老舗茶屋の漆の卓や色見草
杖借りて登る神護寺夕紅葉
人住まぬ村や柿の実あかあかと
回覧に栗棚の地凶過疎の村
閑かなる時宗本山小鳥来る

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



文化祭 高木邦雄

和太鼓の高鳴る里や秋祭
秋の夜半校舎に残る灯の一つ
難解書遂に読み終ふ秋灯下
秋涛の七里ヶ浜や鳶の笛
ひた駆くる櫂の通り黄落す
遠近の熊鈴しげし茸山
文化祭白寿の謡朗朗と

初時雨 岡田史女

葉採る日向薬師のその裾に
银杏散る紅殻塗りの長屋門
立冬やうすき日差しへ物を干す
初冬の白旗なびく池の面
鎌倉の路地に迷ふや初時雨
佇むや木の葉しぐれの段葛
着飾りし親子への初しぐれかな

根深汁 長尾タイ

国道の長き渋滞鱈雲
零余子飯知らず知らずの三杯目
明日の身を思ふ今日ありちちろ鳴く
日の短か秒針刻むビルの影
石路咲くや日毎に歩巾小さくなり
冬薔薇木椅子に憩ふ老の影
根深汁我に叱咤の夕厨

冬ぬくく

池谷鹿次

久しぶりのおふくろの味根深汁
冬ぬくく鴉声なき森の朝
雨晴れて日差したつぷり冬桜
遊歩道の落葉踏みしめ下校の子
石垣の隙間にのぞく冬すみれ
潮風に黄ばむ障子や松の影
雑踏を押し分け進む酉の市

秋の江の島

今村千年

江の島の駅前通りゑのこ草
行く秋や岸辺に寄する波の音
見はるかす島の灯台雁渡る
潮風の紅葉かつ散る社かな
切岸へ寄する八重波島の秋
亡き父に少しぬくめの新走り
とろろ汁母の好みの塩加減

コスモス

池乗恵美子

文机の落書なぞる秋思かな
コスモスの風の秩序を乱しけり
案山子にも流行り廃りや鴉戯れ
対岸の灯のふゆる秋思かな
夕風の色を遊ばせ秋桜
烏帽子岩を標と鳥の渡りけり
双耳壺の影のふくよか後の月

秋の色

大川暉美

秋澄むや谷戸の一川煌めきて
江ノ電の秋望のせて軋む音
濡れ濡れて雁来紅の紅著き
つと来て枝の先なり鬼やんま
椋鳥の大樹に騒ぐ日暮かな
櫓田や雲の一朶を泳がせて
紅葉狩足の先より暮れそめて

青 炎 集

横 浜 六 崎 正 善

露草を残し小庭の刈られけり

故郷の訛を浮かべ温め酒

手の平に色艶ずしり富有柿

末枯や光を過る風の黙

荒海に浮ぶ大鳥冬紅葉

園丁の器械の唸り落葉時

横 浜 大 内 由 紀

萩刈りて黙の日だまり風ばかり

黄落やナウマン象の化石めき

行く秋やスパイスの香のミルクテイ

筆遅遅の義理の手紙や今朝の冬

植木屋の手際気味よく小六月

往年の白黒映画日短し

森 清 堯 選

横 浜 平 木 三 恵 子

ありがたうは魔法の言葉秋澄めり

月の兎探してみたき夜なりけり

針箱の薄き埃や夜半の秋

あと少し上る坂道烏瓜

家芋祖母の煮物のやうに煮て

庭箒立てれば倒れ萩こぼれ

横 浜 小 嶋 紘 一

転倒の足にからまり藪からし

野良猫の背に降る木の実夕まぐれ

ゐるはずの一人の欠けて敬老日

秋霖や昼なほくらき河童橋

夜もすがら金木犀の嵐かな

茶の花や業平まつる寺静か



横浜 小池 桃代

だらだらと身過ぎ世過ぎや星流る
これ以上開けられぬ口ふかし蒔

余生なほ願ひ数多や天高し

秋日和公園画家の絵をのぞき

秋束ね施設の母に届けたり

枯蔦やたぐり寄せるも根のあらず

横浜 平田 きみ

秋暑し土産は軽きものばかり

水に浮く栗の実を除け渋皮煮

色変へぬ松上人像へ寄り添ひて

大加藍柿一木のたわわなり

押し葉へと兼六園の色見草

稽穂の黄金なる田や里のバス

藤沢 宮澤 靖子

天高し若武者どもの棒倒し

残月や水平線に漁り船

色なき風色なき一遍上人像

身に入むや美しき細字の恋の絵馬

遊行寺の参道紅葉かつ散りて

跳ね跳ねてリユックに吊す烏瓜

目黒 五十嵐 貴子

捨てられぬ本や彼の日の夜長また

柿届く目黒育ちの武骨なり

ガムランの響く歌舞伎座文化の日

古今集の恋歌泌むや秋の夜

半券に名画の記憶秋ともし

下戸の家へ届き越後の新走り

横浜 岡 美智子

木洩れ日の移り映ゆるや沢枯梗

山の湯へせまき石段杜鵑草

吾亦紅風の気に入る尺の丈

破蓮の風にこたへてかさかさと

山門をくぐり一息薄紅葉

ジーンズの裾の折り目や牛膝

葉山 伊藤 美緒

広重の富士とは成らず秋の風

木の実降る島の鴉の騒がしき

湯気越しに叫ぶ呼び込み島の秋

龍神の水場に散葉秋惜しむ

秋深き街ユトリ口の巴里のやう

言ひそびれ且つ聞きそびれ秋の果

耕 土 集

岡野 里子 選



平泉さても紅葉の光堂

横 浜 伊藤 鴉

紅葉かつ散る弁財天のおはすごと

秋高し難路忘るる塩むすび

見届くや十年ぶりの城と月

ヌーボーや旬の平目をカルパッチョ

総立ちの選抜リレー運動会

横 浜 杉山くみ子

遠き日の色水遊び螢草

見た目とは名前裏腹ラフランス

キャンパスを案内の孫や木の葉散る

冬晴や展望台は硝子張り

北国は雁飛ぶ空となりにけり

宮 城 京極 久也

障子貼り考妣の仏間明るくす

新米をもて退院の母祝ふ

鯊漁の一斉休漁島に葬

ハレルヤを聴いて休憩煤払

絵画館へと金の絨緞黄落期

横 浜 久島しんの

いつの世の石碑か傾ぎ落葉風

木枯の音にダウン出しにけり

手捻りの黒の陶器や盛る蜜柑

声響く異国の空や寒昂

青北風や旅愁深まる岬の灯

横 浜 岩崎 藍

釣り糸の透ける手応へ秋の湖

別荘に熱き茶の待ち草じらみ

十二月曆に先づは主治医の名

落葉舞ふ小犬に広しドッグラン

賑賑と鴉の落す熟柿かな

横 浜 喜田 君江

覚束無草履を靴に七五三祝

為す事の十人十色冬うらら

枯蟪蛄斧を収めて寺の階

信号や徒にてわたる冬鴉

手つかずの道路用地や猫じやらし 川崎 木村 純子

ブロッコクの目地に動かず櫟の実
疼く歯を抜かずに耐へて暮の秋

柿収穫の話題をちこち月曜日

坊主刈の朝の部活や落葉掻く

とりどりに色成す柿や廃屋に 横浜 津野 桂子

鶉の鳴く声長し空の綺羅

地下街や栗菓子並ぶショーケース

鍋料理茸とキムチどつさり

夕まぐれ桜紅葉の散り初めて

未だ若き貌もありけり捨案山子 横浜 藤本 憲一

団栗や栗鼠と眼の合ふ遊歩道

吹かれ来てピザ窯の奥柿紅葉

ばつたんこ微かな波紋生まれけり

影長し銀杏落葉の坂の道

銀鱗の群れゆく川や秋深し 三浦 田中由紀子

風の音変はる今宵や冬支度

裏山の漆紅葉や朝日影

遠富士や雲の寄せ来る暮の秋

鳥立つや小春の影を落としゆき

陶片の展示並ぶやそぞろ寒 横浜 玉川 勝代

爽やかや見向くオカビの縞の尻
百獣の王の眼差し秋澄みぬ

秋の草水屋の桶にあふれをり

灯火親し歳時記と辞書かたはらに

雨催ひ雲のとぎれて今日の月 横浜 村田 敦子

旅疲れ上州道のいわし雲

白と紅上下二段の萩の花

石組の引立つ庭や石路の花

新沢庵一樽買ひて分け合へり

コスモスの黄白桃色ゆらす風 横浜 片岡登志枝

秋祭太鼓と笛と子供等と

初酔橘小ぶりなれども香しき

柿熟れて届かぬ高さ空隠す

姦しきうはさ話や秋没日

夕つ方二夜の月のほのあかり 横須賀 河野 礼子

秋うらら湖面を滑る鳥の群

久々の洗濯日和今朝の冬

見はるかす田圃をむすぶ冬の虹

裸木の纏ふ雫や光さす

くじ引きの子らの歓声納涼会
突風に耐へる葡萄の甘露かな
里山のつくつく法師肅々と
直売の枝豆の味濃かりけり
白桃を父のごとくに丸かじり

横浜 津野 桂子

電子音押し寄す職場休暇明

川崎 木村 純子

二期やシニアの交通指導員
考も未だ生まれて居らず震災忌
敬老日記念の品を配る爺
秋茄子の生のサラダやあく抜いて

新築の槌音高し秋暑し

横浜 小林 拓路

失念の切ないものよ秋扇

横浜 佐藤 勝代

爽籟や学内食堂ランチ時

台風の進路気になり旅予定

強風の中やコスモス立たむとす
なりなりて破芭蕉とはなりにけり

秋夕焼富士の浮き立つ相模湾

三浦 田中由紀子

やはらかき日差しの厨秋の声

薄紅の広がる雲や月の秋

見晴るかす霧の黒富士湖の風

江の島や端唄流るる秋の浜

祭果て水音のみの残る町

横濱 河野 礼子

冷房や阿亀鸚哥の為につけ

本丸へ続く木立や蝉時雨

客用のグラス磨ひて盆支度

爽籟や牧牛の寄る塩くれ場